

「ファニーゲーム U. S. A.」 ★★★

2008 (平成20) 年12月12日鑑賞
東映試写室>

監督・脚本：ミヒヤエル・ハネケ
アン・ファーバー (ジョージの妻) / ナオミ・ワッツ
ジョージ・ファーバー (アンの夫) / ティム・ロス
ポール (美青年2人組の兄貴分) / マイケル・ピット
ピーター (美青年2人組の弟分) / ブラディ・コーベット
ジョージ (アンの息子) / デヴォン・ギアハート
フレッド (隣の別荘の主人) / ボイド・ゲインズ
イブ (フレッドの妻) / リンダ・モラン
ベッツィー (ロバートの妻) / シオバン・ファロン・ホーガン
ロバート (対岸の別荘の住人) / ロバート・ルポーネ
ベッツィーの義妹 / スザンヌ・ハネケ
2007年・アメリカ、イギリス、フランス、オーストリア、ドイツ映画・111分
配給 / 東京テアトル

<ドイツの巨匠が、なぜUSA版を？>

1942年ミュンヘン生まれのミヒヤエル・ハネケ監督作品で私が観たのは『隠された記憶』(04年)だけ。カンヌ国際映画祭で監督賞など3賞を受賞したこの映画について、私は「問題提起は奥深く衝撃的だが、同時にひどく難解・・・・?目を皿のようにしてスクリーンを凝視することと、映画鑑賞後のディスカッションが不可欠・・・・?」と書いた(『シネマルーム11』112頁参照)。

プレスシートによると、そんな彼が世界的注目を集めたのが『ファニーゲーム』(97年)。「カンヌ国際映画祭コンペティション部門で上映されるが、あまりに衝撃的な内容に会場の反応は賞賛とブーイングの入り混じるものだった」らしい。それから10年、ミヒヤエル・ハネケ監督は新たに舞台をアメリカに移し、その完全リメイク版をハリウッドで製作することに。それは一体なぜ?それを考えることが、この映画へのアプローチの第一歩!

<トリプルSとは？>

この映画はトリプルSとのこと。ミシュランガイドは、三つ星、二つ星、一つ星でレストラン、ホテルをランク付けしているが、Aaa、Aa、A、Baa、Ba、Bという長期的信用格付けを行うのはムーディーズ。日本では金融庁が投資家の参考データとするために、民間企業の信用度、優劣を判断する指定格付け機関を定めているが、そこではAAA、AA、A、BBB、BB、Bの表現で格付けがされている。また、スリーMは日本におけるスーツの専門店だが、トリプルSすなわち「SSS」って、一体ナニ?

プレスシートによると、それはサディスティック、ショッキング、サスペンスのトリプルS。つまり、①予測不可能な展開に、観客はゲームの犠牲者になったかのような錯覚に陥る、②映画史を覆す手法で、完膚なきまでの悪夢をより強烈に再現、③観るものすべてを絶対的なゲームへと巻き込み、不条理な暴力の恐怖を叩きつける、というものらしい。なるほど、なるほど。

さあ、イントロダクションにおける、そんな売り文句はホンモノ?それとも誇大広告?それは、あなた自身の目でじっくりと。

<観客に向かって問いかけられても・・・>

アメリカ大統領選挙における、オバマVSクリントンの民主党候補選びそして、民主党オバマVS共和党マケインによる壮絶な大統領選挙の姿をみていると、国民参加の民主主義のすごさというものを実感することができる。他方、総選挙回避、第2次補正予算の国会提出回避というダブル回避によって末期的症状を呈しているのが麻生太郎政権だが、2005年の9・11総選挙における小泉フィーバーは、劇場型選挙によって実現したもの。

国政への国民参加、地方自治への住民参加は永遠のテーマだが、映画とは作り手から観客に一方向的に発信する芸術だから、観客のスクリーン参加というテーマは本来ないはず。ところがミヒヤエル・ハネケ監督はこの映画で、観客にも『ファニーゲーム』に参加することを要請しているようだ。暗にそう言っているのはよくわかるのだが、ナマナマしくスクリーン上で、悪の権化のような美青年の兄貴分ポール(マイケル・ピット)から、「あなたはどう思いますか?」と問いかけられても・・・?

<ナオミ・ワッツの熱演に注目!>

ナオミ・ワッツの代表作は①『ザ・リング』(02年)、②『21グラム』(03年)、③『キング・コング』(05年)。私は①も③も観ていないが、②はバツチリ。この映画がすごいのは、ナオミ・ワッツがアカデミー賞主演女優賞に、ベニチオ・デル・トロが助演男優賞にノミネートされたこと。また、『ミスティック・リバー』(03年)でアカデミー賞主演男優賞に輝いた、ショーン・ペンの『21グラム』での演技がすばらしかったのは当然。

そこで、私は「ナオミ・ワッツの熱演は立派」との小見出しの下、「その演技力も、二人の男優に負けないほど堂々としたものなら、そのヌードシーンの大胆さも立派。この映画は、きっと彼女の代表作となるだろう。」と書いたが、そんなナオミ・ワッツの第2の代表作となると思うのがこの映画。

ミヒヤエル・ハネケ監督は、主役の女性はナオミ・ワッツと決め「他の女優ではやりたくなかったし、幸運にも彼女は快諾してくれました。」と述べている。そんな期待に応えた彼女は、こんな奇妙なゲームに巻き込まれる中でみせる、戸惑い、恐怖、悲しみ、憎しみ、絶望などの表情と、何とか状況を打開するべく前向きに努力するひたむきな行動力を見事に演じている。とりわけ2人の若者から「余分な脂肪などついていないことを証明するために、服を脱げ!」と命じられ、仕方なくそれに従う彼女の屈辱的な表情と服を脱いでいく仕種は絶品。さらに、彼女はその後ショーツとブラだけの姿を長時間スクリーンでみせてくれるが、その美しい肢体はとて1968年生まれとは思えないもの。そんなスケベおやじ(エロおやじ?)的視点はともかく、第2の代表作となるであろう、この映画でのナオミ・ワッツの熱演に注目!

<卵に始まり、卵に終わる演出はさすがだが・・・>

柔道や剣道などの日本武道は「礼に始まり、礼に終わる」が、「卵に始まり、卵に終わる」のがこの映画。プレスシートの最初の写真も、アン(ナオミ・ワッツ)からもらった4個の卵を床に落としてしまったため、アンがそれを片づけているシーン。

夫ジョージ(ティム・ロス)、一人息子のジョージ(デヴォン・ギアハート)と共にヨットを牽引しながら、アンが湖の別荘にやってきたのは数週間ここでゆっくり、家族水いらずで過ごすため。隣の別荘の住人でゴルフ仲間でもあるフレッド(ボイド・ゲインズ)とその妻イブ(リンダ・モラン)に声をかけて別荘内に入った直後、ピンポンとチャイムを鳴らしたのが白い手袋をはめ、白いポロシャツと半ズボンという服装の美青年ピーター(ブラディ・コーベット)。イブの使いで、卵を4個分けてほしいと頼みにきたピーターに対して、アンは気前よく卵を渡したが・・・。さあ、これがゲームの始まりだったとは、お釈迦様でもご存じないはず・・・。

他方、こんなシーンで始まる物語のラストは、ピーターの兄貴分であるポールが湖の対岸にある、ロバート(ロバート・ルポーネ)の別荘を早朝訪れ、いぶかしそうに出てきた妻のベッツィー(シオバン・ファロン・ホーガン)に対してアンの使いで卵を分けてもらうためにやってきたと話しかけるシーン。「さあ、どうぞ」と部屋の中に招き入れられたポールが、そこでみせる表情とは?

ミヒヤエル・ハネケ監督のこんな演出はさすがだが、多くの観客は既にかなり気分が悪くなっているのでは・・・?